松之廊下周辺について

弘化度と万延度江戸城本丸御殿の異同に関する研究

ANALYSIS ABOUT SURROUNDING PARTS OF MATUNO-ROKA

A study on the difference of Honmaru palace between Honmaru palace in Koka eras and Honmaru palace
in Manen eras, Edo castle

小 粥 祐 子*, 平 井 聖**

Masako OGAI and Kiyosi HIRAI

This paper describes the difference in surrounding parts of Matuno-Roka in Honmaru Palace in Koka and Manen eras through Floor Plan, Roof Plan, Elevation and Section, Sectional Details Drawing.

- 1, There exists a difference in floor plans of Osukiyakumikashira and Hinobanheya between two eras.
- 2, There exists a difference in roof plans of southeast corner of Matuno-Roka and Okiyomedokoro between two eras.
- 3, There are Eaves Height is higher in Manen eras than in Koka eras while same design is adopted.
- 4, Papers are attached to the floor plan to show the second floor plan or design changes.

Keywords: Edo Castle, Honmaru Palace in Koka Eras, Honmaru Palace in Manen Eras, Matuno-Roka, Floor Plan, Roof Plan

江戸城、弘化度本丸御殿、万延度本丸御殿、松之廊下、平面図、小屋伏図

1. はじめに

本研究は、幕末期の江戸城本丸御殿再建について、現存する絵図を用い検討するものである。江戸城本丸御殿は、幕府にとって政庁であり、将軍の住居であったが、火災等により7回の再建と将軍の代替わりなどに複数回の修復が行われた。公的な建物の再建には、先例を踏襲することが多く、江戸城本丸御殿の場合も例外ではない¹⁾。江戸城本丸御殿に関する研究は、先学により様々な視点から行われてきたが²⁾、再建についてもいくつかの研究がある³⁾。

しかし、これまでの再建に関する研究では、作事の際に実際に使われた絵図（以下、作事関係絵図）を用いての詳細な考察はされていない。そこで、本研究では、作事関係絵図が多く現存する幕末期、弘化2(1845)年に竣工した本丸御殿の表・中奥部分（以下、弘化度）と万延元（1860）年に竣工した本丸御殿の表・中奥部分（以下、万延度）を取り上げ、作事関係絵図を比較することにより、両度の本丸御殿に見られる違いについて明らかにする。

史料は、弘化度に関する東京国立博物館所蔵文書⁴⁾と、万延度に関する東京都立中央図書館特別文庫室所蔵東京詰料文書⁵⁾（重要文化財「江戸城造営係資料(甲良家伝来)」）である。いずれも、江戸幕府の大棟梁甲良家の末裔から、明治～昭和初期にかけて、それぞれの館が取得したものである。

これらの他、弘化度・万延度の作事に関する資料が、『東京市史稿皇城篇 3』に収められている。中でも、万延度造営時に、大棟梁甲良若狭と辻内近江によって書かれた『万延度江戸城御本丸御普請記』は、万延度の作事関係絵図の作成経緯を知る上で重要な資料である。

本稿は、松之廊下周辺部分⁶⁾を取り上げる。万延度再建時に、松之廊下周辺について設計変更が行われた部分の一つである⁷⁾。そこで、平面図、矩計図、建地割図⁸⁾、小屋伏図を用い、弘化度と万延度の松之廊下周辺の異同を明らかにする。

本研究では、前例を踏襲し、ほとんど変化がなかったとされる万延度本丸御殿再建時に、どのような設計変更が行われたかを明らかにすることを目的とし、それら設計変更の原因を考察することによって、江戸城本丸御殿の設計手順について明らかにしたいと考えている。

2. 松之廊下周辺に関する図面について

2-1 現存図面について

弘化度と万延度の松之廊下を含む工区⁹⁾（以下、松之廊下周辺）の現存図面は、表1の通りである¹⁰⁾。この他に、弘化度の平面図は、『御本丸御表御中奥御殿向惣絵図』（東誌 616-10）、『江戸城御本丸御表御中奥御殿向御櫓御多門共総絵図』（東誌 616-14）、『江戸本丸

* 昭和女子大学大学院生活機構研究科 大学院生・修士(学術)

Graduate Student, Graduate School of Practical Science (Dr.'s Degree), Showa Women's University

** 昭和女子大学大学院生活機構研究科 教授・博士(工学)

Prof., Graduate School of Practical Science, Showa Women's University, Dr. Eng.

表向絵図』（東博 2364）、『御本丸御殿向絵図』（東博 2355）、小屋伏図は、『御本丸御殿向銅葺御屋根水取絵図』（東誌 616-12）、『御本丸表奥御殿向屋根絵図』（東博 2367）がある。（以下、図面、史料等の所蔵先については、東博-東京国立博物館、東誌-東京誌料、と略記する。また、図面名称について、特に記述のない場合、表題より図面名称が明かである図面は、『 』、表題がなく本論文の整理上つけられた図面名称については、（ ）をつけて記述した。）

表 1 弘化度本丸御殿と万延度本丸御殿の松之廊下周辺の現存図面

資料番号	所蔵番号	図面種類	図面名称
弘 化 度			
弘01	東博2355-3-⑥	床	『溜り御床絵図』
弘02	東博2355-4-⑩	(建)	(御召仕立所建地割)
弘03	東博2355-4-⑪	(建)	(御数寄屋勝手建地割)
弘04	東博2355-4-⑬	(矩)	(火之番部屋矩計)
弘05	東博2355-4-⑭	(矩)	(上之御三家部屋御用場矩計)
弘06	東博2355-8-⑥	矩	『御数寄屋番所矩計』
弘07	東博2355-15-①	矩	『御三家部屋下之御部屋椽側西庇境』
弘08	東博2355-15-④	矩	『御三家部屋下之御部屋用部屋矩計』
弘09	東博2355-15-⑤	矩	『御三家部屋軒矩計』
弘10	東博2355-15-⑥	矩	『御三家部屋御用場矩計』
弘11	東博2355-15-⑦	(天)	(御溜り・小溜り格天井割)
弘12	東博2355-15-⑧	矩	『椽溜南側矩計』
万 延 度			
万01	東誌6195-02	矩	『御本丸上之御部屋下之御部屋中坪境筋子堀矩計』
万02	東誌6165-19	小	『御本丸松之御廊下御三家部屋椽溜数寄屋小屋絵図』
万03	東誌6168-05	建	『御本丸松之廊下建地割絵図』
万04	東誌6165-20	平	『御本丸松之御廊下御三家部屋椽溜数寄屋地絵図』

凡例： 図面種類… 床：床・棚の正面・側面図、建：建地割図、矩：矩計図、
天：天井伏図、小：小屋伏図、平：平面図

註：図面名称は、弘化度の図面名称に（ ）がついているものは、図面に表題が書き込まれていないため、整理上つけた名称で、伊東龍一「江戸城の作事と各図解説」『江戸城Ⅰ<郭>』至文堂 1992 pp269-273 によった。

以上のとおり、弘化度の松之廊下周辺の図面は、矩計図、建地割図、天井伏図が現存する。江戸城本丸御殿作事の際には、御殿全体を幾つかの工区に分けて作事を行う。このため、作事の際には、工区毎に詳細な平面図(地絵図)が作られる¹¹⁾。弘化度の松之廊下周辺については、このような工区毎に書かれる詳細な平面図の現存を確認していない。そこで、本稿では、『江戸城御本丸御表御中奥御殿向御櫓御多門共総絵図』（東誌 616-14）と『御本丸御殿向絵図』（東博 2355）を、屋根についても平面図と同様に工区毎に書かれる詳細な小屋伏図は確認していないことから、『御本丸表奥御殿向屋根絵図』（東博 2367）を用いる。

これに対し、万延度は、松之廊下を含む工区に関する図面は、松之廊下の矩計図・建地割図、地絵図(平面図)、小屋絵図(小屋伏図)が現存する¹²⁾。この内、建地割図は松之廊下の部分のみ、矩計図は御三家部屋下之御部屋の境部分の1枚の現存を確認している。

2-2 現存図面にみる造営度の判断根拠について

江戸城本丸御殿が建っていた敷地はゆるい南下がりの傾斜をもっている。そのため、高さ方向に一つの基準を設ける必要があった。これまでの研究により、両度の作事の図面から、弘化度では基準位置を御休之息石上端とし、万延度では、御座之間石上端としていたことが明らかとなっている¹³⁾。また、弘化度、万延度とも図面の表には、朱筆で、御勘定方、御作事方、御目付方、吟味方と四手御

役の役名が書かれ、各役名の下に、それぞれの印と思われる墨印の押印がある¹⁴⁾。

3. 弘化度と万延度の松之廊下周辺の平面について

弘化度と万延度の松之廊下周辺の平面を比較する。

3-1 弘化度の平面について

弘化度の松之廊下周辺の平面は、平面図¹⁵⁾によって御数寄屋組頭が含まれる建物の部屋構成が異なる(図1)、『江戸城御本丸御表御中奥御殿向御櫓御多門共総絵図』（東誌 616-14）では、北から1間半×1間が1室、御数寄屋組頭と名付けられた1間半×1間半が2室の3室から構成されている。一方、『御本丸御殿向絵図』（東博 2355）では、2間×1間半と御数寄屋組頭と名付けられた2間×1間半の2室から構成されている。このことは、弘化度本丸御殿の平面が、変更が加えられた可能性があることを示している。

また、御清所の南側に3室から構成される建物(図1-②)は、御清所の断面を表現した(上之御三家部屋御用場矩計)(東博 2355-4-⑭)をみると、東側にある御三家部屋から繋がった建物ではなく、独立した建物である。しかし、平面図をみると、『御本丸御殿向絵図』（東博 2355）では独立した建物として表現されているのに対して(図1-①)、『江戸城御本丸御表御中奥御殿向御櫓御多門共総絵図』（東誌 616-14）では、一体の建物として表現されている(図1-②)。

江戸城本丸御殿には、二階屋の建物があった。松之廊下周辺において2階に昇るために設けられている階段は、『御本丸御殿向絵図』（東博 2355）を見ると、松之廊下周辺には、6段の階段が御数寄屋勝手、火之番部屋に2ヶ所、火之番部屋の南側に3段と2段の階段が1ヶ所ずつある。

3-2 万延度の平面について

万延度の松之廊下周辺の平面である『御本丸松之御廊下御三家部屋椽溜数寄屋地絵図』（東誌 6165-20）は、掛け紙が掛けられている。掛け紙は、御数寄屋勝手(図2)、火之番部屋、御数寄屋組頭部屋、物置（『御本丸松之御廊下御三家部屋椽溜数寄屋地絵図』では、錠前付と書かれている。）¹⁶⁾ (図3)、御酒部屋の5ヶ所にある。

御数寄屋勝手、火之番部屋には、それぞれ6段と8段の階段があることから、2階の平面を表すための掛け紙であることが分かる。

物置には、掛け紙下の平面に「タン」と書き込まれた2段の階段があり、掛け紙上の同位置にも段が書かれている。

御数寄屋組頭部屋は、掛け紙下の平面によると、北から1間×2間、御数寄屋組頭部屋と名付けられた1.5間×2間、御召道具置所と名付けられた0.5間×2間、1間×2間の4室からなり、西側の縁の4間×0.5間の南端に「タン」と書かれた段がある。掛け紙上には、1間×1.5間、御召道具置所と名付けられた2間×1.5間、御数寄屋組頭部屋と名付けられた1.5間×1.5間の3室が書かれている。なお、万延元年12月に書かれた、『江戸城御本丸万延度御普請御殿向表奥惣絵図』（東誌 616-11）では、御数寄屋組頭部屋と物置の掛け紙に書かれた平面が書き込まれている。また、同位置の小屋伏では、掛け紙上の平面と同規模の平面であることから変更のための掛け紙ではないかと思われる。

図 1-① 『江戸城御本丸御表御中奥御殿向御櫓多門共総絵図』
(東誌 616-14)

図 1-② 『御本丸御殿向絵図』 (東博 2355)
図 1 御数寄屋組頭-御数寄屋勝手の平面 -弘化度-

図②-1 1枚目

図③-1 1枚目

図 2-② 掛け紙部分
図 2 御数寄屋勝手の平面 -万延度-
(破線は、掛け紙が掛けられている位置)

図 3-② 掛け紙部分
図 3 物置の平面 -万延度-

御酒部屋については、『江戸城御本丸万延度御普請御殿向表奥惣絵図』（東誌 616-11）の同位置に押入れがあることから、御酒部屋の東側に押入れを建増した変更のための掛け紙である。

弘化度と万延度の平面を比較すると、建物の構成は同じであるが御数寄屋組頭のある建物の平面と火之番部屋と物置が含まれる建物の階段数が異なる。

御数寄屋組頭は、先に述べたように、弘化度に変更の可能性がある、その弘化度の両方の平面と万延度の平面は異なる。（図 1）

火之番部屋については、平面図に描かれた階段数が、弘化度は 6 段、万延度は 8 段である。

4. 弘化度と万延度の松之廊下周辺の屋根伏と軒高について

4-1 弘化度の屋根伏（図 4）

『御本丸表奥御殿向屋根絵図』（東博 2367）によると、松之廊下周辺の屋根は、松之廊下、火之番部屋は、寄棟に、桜溜・小溜は、切妻に屋根をかけ、17 間半続く松之廊下の部分には、中庭に向けて 2 ヶ所に東向きの千鳥破風を置いている。御三家上・下部屋、御数寄屋勝手は、寄棟で、銅瓦葺である。一方、御三家上部屋の西側は、土瓦葺としている。

4-2 万延度の屋根伏（図 5）

『御本丸松之御廊下御三家部屋桜溜数寄屋小屋絵図』（東誌 6165-19）によると、万延度の松之廊下周辺の屋根は、主要な建物については、弘化度とほぼ同様の屋根としている。しかし、土瓦葺としている御数寄屋組頭が含まれる建物、物置のある部分については、土瓦葺の表現の上に、白い掛け紙があり、これらの部分は、平面図上でも掛け紙がされている部分である。

また、松之廊下は、大広間の西北端から 10 間半、北に折れて 17 間半、L 字型に続く廊下であるが、この北に折れた部分（以下、松之廊下南東隅）の西側は、軒出と軒高を変更するための掛け紙がされている。

4-3 弘化度と万延度にみる屋根伏の異同

弘化度と万延度の屋根伏を比較すると、次の 2 ヶ所が異なる。

① 松之廊下の南東隅（図 6）

松之廊下の折部分は屋根を納め方が異なる。弘化度は屋根をかける巾と棟高さを 2 度調節しているのに対して、万延度は 1 度で納めている。さらに、土瓦葺の御数寄屋番所、物置が、松之廊下部分へ取り付く部分の納め方も異なっている。

② 御清所（図 7）

御清所の屋根は、弘化度においても、万延度においても、切妻屋根になっている。御清所の北側にある御水屋、御召仕立所との屋根の取り合い部分について、弘化度は、（上之御三家部屋御用場矩計）（東博 2355-4-⑭）によると、御清所の棟が御水屋に向かって斜めに上がり、御清所と御水屋の屋根が、連続している。これに対して、万延度は、御水屋の屋根にのりかかるような形で棟がぶつかっている。

なお、弘化度と万延度の屋根伏で、屋根のかけ方に違いが見られる松之廊下の南東隅と御清所部分は、万延度本丸御殿を設計する際に、大棟梁甲良若狹が弘化度本丸御殿の設計内容を勉強するために書いたとされる『本丸御殿向銅葺御屋根水取絵図』（東誌 616-12）をみると、屋根が書かれていない。このことから、弘化度の松之廊下の南東隅の折部分と御清所については、図面の通りでは屋根をかけることが出来なかったと考えられる。

4-4 弘化度と万延度の軒高について（表 2）

弘化度の軒高については、弘化度の矩計図・建地割図¹⁷⁾より得られる数値を、万延度については、『御本丸松之御廊下御三家部屋桜溜数寄屋小屋絵図』（東誌 6165-19）に書かれた数値を用いる。弘化度と万延度の松之廊下周辺の軒高を比較すると、次の 4 ヶ所について軒高が異なることが分かる。なお、表 2 中、弘化度の㉑㉒㉓㉔文字は、弘化度については、図 4、万延度については図 5 の㉑㉒㉓㉔文字と対応する。

御数寄屋番所と火之番前縁

御数寄屋番所と火之番前縁の屋根は、両度とも、寄棟と片流れになっており、同じ屋根のかけ方である。弘化度と万延度の御数寄屋番所、弘化度と万延度の火之番前縁の軒高を比較すると、弘化度が 1 丈 1 尺 1 寸（表 2-弘化度㉑、図 4-㉑）であるのに対し、万延度が 1 丈 1 尺 3 寸（表 2-万延度㉓、図 5-㉓）で 2 寸高い。

火之番部屋

火之番部屋は、弘化度の（火之番部屋矩計）（東博 2355-4-⑬）と万延度の屋根伏によると両度とも、二階屋であった。この火之番部屋の軒高も、弘化度が 1 丈 2 尺 2 厘 5 毛（表 2-弘化度㉒、図 4-㉒）であるのに対し、万延度は 1 丈 5 尺 4 寸 7 分 5 厘（表 2-万延度㉔、図 5-㉔）で万延度が 3 尺 4 寸 2 厘 5 毛高い。これは、火之番部屋の階段数が、弘化度は 6 段であったのに対し、万延度は 8 段と段数が増えていることから、1 階の階高が高くなったためと考えられる。

御数寄屋組頭

御数寄屋組頭は、縁側底部分の軒高が、弘化度が 9 尺 3 寸 3 分 5 厘（表 2-弘化度㉑、図 4-㉑）、万延度が 1 丈 1 寸（表 2-万延度㉒、図 5-㉒）、半間東へ入った軒高は、弘化度が 1 丈 5 寸 4 分（表 2-弘化度㉑、図 4-㉑）に対し、万延度が 1 丈 5 尺 7 寸 2 分 7 厘 5 毛（表 2-万延度㉓[※]、図 5-㉓[※]）である。御数寄屋組頭の開口部は、弘化度が 1 丈 4 尺 9 寸 2 分 7 厘 5 毛（表 2-弘化度㉑、図 4-㉑）、万延度が 1 丈 5 尺 7 寸 2 分 7 厘 5 毛（表 2-万延度㉓[※]、図 5-㉓[※]）で、いずれの所の軒高も、万延度の方が高い。

数寄屋勝手

御数寄屋勝手は、（御数寄屋勝手建地割）（東博 2355-4-⑩）と万延度の屋根伏から、二階屋で、両度とも階段数は同じである。しかし、御数寄屋勝手の 2 階の軒高は、弘化度が 1 丈 8 尺 1 寸（表 2-弘化度㉑、図 4-㉑）、万延度が 1 丈 8 尺 9 寸（表 2-万延度㉑、図 5-㉑）で、万延度の方が 8 寸高い。

図4 松之廊下周辺の屋根伏図¹⁸⁾ -弘化度-

①②⑬は、表2に示した矩計、建地割が示す位置

図5 御本丸松之御廊下御三家部屋桜溜数寄屋小屋絵図

(東誌 6165-19)-万延度-

表2 松之廊下周辺の軒高

弘化度			建物(部分)名	万延度	
番付	御休息石上端より軒高	資料番号		番付	御遊之間石上端より軒高
①	1丈4尺口寸分	弘08	松之廊下(東)	-	1丈4尺4寸2分
②	1丈4尺6寸	弘01 弘09	御三家部屋(南)縁	⑬*	1丈1尺3寸4分
⑬	1丈5尺4寸7分5厘	弘02 弘04 弘06 弘08	松之廊下(西)	②	1丈5尺4寸7分5厘
⑬	1丈1尺1寸	弘04 弘06	御数寄屋番所 火之番部屋前縁	⑬	1丈1尺3寸
⑬	1丈2尺2寸5厘	弘02 弘05	火之番部屋	②	1丈5尺4寸7分5厘
②	1丈5寸4分	弘02 弘03	御数寄屋組頭(東)	⑬*	1丈5尺7寸2分7厘5毛
②	9尺3寸3分5厘	弘02 弘03	御数寄屋組頭縁	②	1丈01寸
⑤	1丈4尺9寸2分7厘5毛	弘02 弘03	御数寄屋組頭	⑬*	1丈5尺7寸2分7厘5毛
⑦	1丈8尺1寸	弘03	御数寄屋勝手	⑤	1丈8尺9寸
②	1丈2尺3寸3分5厘	弘05	御清所(西)	②	1丈5尺4寸7分5厘
⑤	1丈7寸	弘05	御清所縁	②	1丈07寸

凡例;

番付…弘化度: 矩計図、建地割図の桁に書かれている「①②⑬」文字

万延度: 御本丸松之御廊下御三家部屋桜溜数寄屋小屋絵図に書かれた各建物の軒位置を表す「①②⑬」文字

資料番号…弘化度の軒高の典拠とした資料を明記した。資料番号は、表1参照

建物(部分)名…主として、万延度の小屋絵図上に書かれた建物名を用いるが、()内の方位は、著者による。

図6-① -弘化度-

図7-① -弘化度-

図6-② -万延度-

図7-② -万延度-

図6 松之廊下南東隅の屋根伏

図7 御清所の屋根伏

5. まとめ

松之廊下周辺について、弘化度と万延度を比較の結果、次のことが明らかとなった。

- ①-1 御数寄屋組頭の平面は、弘化度の平面に1度変更された可能性があり、また、弘化度の両方の平面と万延度の平面も異なる。
- ①-2 火之番部屋の平面は、弘化度と万延度とでは、1階の階高が万延度の方が高く、階段数も多い。また、弘化度と万延度とでは、2階までの軒高が異なり、万延度の方が高い。
- ② 弘化度と万延度の屋根伏を比較すると松之廊下の南東隅と御清所の屋根の納まりに違いが見られる。
- ③ 屋根のかけ方が同じ箇所でも、軒高に違いがみられ、弘化度より万延度の方が、軒高が高く設計されている。
- ④ 平面図に掛けられる掛け紙には、2階平面を表すためのもの、設計内容を変更するためのものがある。

なお、松之廊下周辺については、弘化度の現存する屋根伏では構法上、収まらない部分がある。弘化度の『御本丸表奥御殿向屋根絵図』（東博2367）の松之廊下周辺に関し、屋根伏図の通りに施工されたかについては、弘化度の竣工図が確認できていないことから、問題が残るところである。弘化度の屋根伏図において収まらない部分については、万延度再建の際に、設計変更されていることから、弘化度設計時から万延度竣工時までの、いずれかの段階において、屋根伏図の設計変更が行われたと考えられるが、現段階においてはその時期を特定できていない。この点は今後の課題である。

謝辞

本研究にあたり、東京都立中央図書館サービス部情報サービス課特別文庫室係の皆さまには多くの便宜を図っていただきました。ここに記して謝意を表します。

註

¹⁾ 伊東龍一「江戸城の作事と各図解説」『江戸城Ⅰ〈城郭〉』至文堂1992 p277

御殿は中奥や大奥の一部に若干の変更はあったが、弘化度御殿をほぼ踏襲して復興となり、焼失した諸櫓も再建された。

西和夫「江戸城弘化度本丸御殿・天保度西の丸御殿の障壁面の小下絵」『建築史研究の新視点—建築と障壁面』中央公論美術出版

少しでも早く再建するために、いろいろな工夫が凝らされる。例えば、「有形通り」つまり前例通りにする。早く建てるためのひとつの工夫である。この場合の前例とは焼ける前の建物を指す。焼失する以前の建物は図面が残っているので、それを使う。新しく設計する手間を省くのである。

²⁾ 内藤昌「万延度御普請江戸城本丸大広間の設計について」日本建築学会論文報告書 第61号 1954/『江戸と江戸城』鹿島出版会SD選書 1966『江戸図屏風』毎日新聞社1972、村井益男『江戸城』中央公論社1964/『江戸城』小学館1986、平井聖「江戸図屏風における建築」『江戸図屏風』平凡社1971、西和夫『江戸建築と本途帳』鹿島出版会SD選書1974、小松和博『江戸城—その歴史と構造』名著出版1985、平井聖・伊東龍一『江戸城Ⅰ〈城郭〉』至文堂1992、深井雅海「江戸城本丸御殿図に見る中奥・表向・大奥」（上・中・下）徳川林政史研究所 研究紀要1994、等がある。

³⁾ 内藤昌『江戸図屏風』毎日新聞社1972、西和夫『江戸建築と本途帳』鹿島出版会SD選書1974等がある。

⁴⁾ 東京国立博物館資料部保管。その多くは、伊東龍一『江戸城Ⅰ〈城郭〉』至文堂1992.10所収。

⁵⁾ 東京都立中央図書館所蔵されている作事関係絵図は、そのほと

んどが、昭和62年に国指定重要文化財に指定され、現在、修復事業が進められている。

⁶⁾ 渡辺勝彦「江戸城建築における生産システム」『江戸城』小学館1986 p140

江戸城本丸御殿（表・中奥）作事の際には、御殿を、初度と後度の二期に工事期間を分け、さらに幾つかの工区に分けて作事を行う。

弘化度の松之廊下を含む工区は、『寛永以来御作事奉行御大工頭代々録7』（国立国会図書館蔵）によると、「後度つ印」の工区で、松之廊下、上下御部屋御同所御用場桜溜の建物がある工区である。万延度の松之廊下を含む工区は、「（西丸御受持大工名控え）」（東京都立中央図書館蔵）によると、松之廊下、上下御部屋、御同所御用場、桜溜り小溜り、御物置、御数寄屋、四本戸御門、御口次之者詰所、腰掛、雪隠を含む工区である。

⁷⁾ 平井 聖「江戸城〔本丸御殿〕の図面」『江戸東京博物館総合案内』財団法人 江戸東京歴史財団平成5年3月27日 pp24~25

（万延度本丸御殿（表・中奥）再建の際に工夫がなされていることについて）

平面は同じなのに、屋根の収まりに相違が認められる。梁や桁の高さを微妙にかえ、時には梁の左右の高さをわずか3寸ばかり違いを傾けている。

⁸⁾ 現在の図面表記でいう、立面図と矩計図を併せて表記した図面のこと。

⁹⁾ 註6を参照

¹⁰⁾ このうち、弘化度本丸御殿（表・中奥）の①～⑩は、もともと、「江戸城」（東誌2355）全20帖に一括整理されているものである。この全20帖にまとめられた「江戸城」（東博2355）は、各絵図が無秩序に貼りこめられているもので、この全20帖の中に収められている弘化度本丸御殿（表・中奥）の平面図「御本丸御殿向繪図」（東博2355-20-1）の上に施されている□（建地割絵図）印・△（矩計絵図）印と対応させることが出来ると考えられる。

¹¹⁾ 「御普請絵図類仕立方」『万延度江戸城御本丸御普請記』『東京市史稿 皇城篇3』所収 1912 p1258

¹²⁾ 渡辺勝彦「江戸城建築における生産システム」『江戸城』小学館1986 p140

¹³⁾ 伊東龍一「江戸城関係図面と幕府作事方大棟梁甲良家 5. 弘化度・万延度本丸御殿の建地割について」『江戸城Ⅰ〈城郭〉』至文堂 平成4年 p255

万延度の軒高は『万延度江戸城御本丸御普請記』の「後度御場所御座敷向軒高其外調」によると、「御座之間石上端」の引き通し高さを基準としている。一方、弘化度の引き通しをどの高さに設定したかは、文書などによる記録がなく明らかではないが、「御休息之間石上端」としている建地割は、現存している図面の内容から弘化度のものであると考えられ、松之廊下周辺の建地割、矩計に関しても同様のことが言える。

¹⁴⁾ 四手御役の押印は、万延度本丸御殿（表・中奥）造営時に書かれた「御普請絵図類仕立方」によると、

一、御中奥御殿向・御座之間・御休息・御小座敷・御小納戸・御新座敷・御湯殿・御手水部屋等之御座所向并御表御殿向・御白書院・御黒書院・大広間等ハ、都而天保度御普請御形之通り、曲尺二寸以て壹間之割合とシテ、裏半紙ヲ以、床カ之高下ヨリ、軒桁迄、御障子・襖・欄間等ニ至ル迄明細ニ引立、起絵図トシテ、伺ニ差出シ、御模様替・御建増其外共、御付札等ニ而、御下ケ渡ニ相成候節者、其御場所ヲ引直シ、再伺ニ差出シ、御治定と相成候ハハ四手御役々之御調印済之上、御下ケ渡シ。其起シ絵図ヲ元トシテ地繪図之引立方仕候。（略）

とある。

¹⁵⁾ 本稿では、『江戸城御本丸御表御中奥御殿向御櫓御多門共絵図』（東誌616-14）と『御本丸御殿向絵図』（東博2355）の松之廊下周辺を比較した。

¹⁶⁾ 『御本丸松之御廊下御三家部屋桜溜数寄屋地絵図』（東誌6165-20）の1枚目に「錠前付」、江戸城御本丸万延度御普請御殿向表奥惣絵図（東誌616-11）上に「物置」と書かれている。

¹⁷⁾ 表1を参照

¹⁸⁾ 『御本丸表奥御殿向屋根絵図』（東博2367）の松之廊下周辺部分に、建地割図、矩計図の断面位置を特定した。

著者『江戸城本丸御殿弘化度造営時の建地割図・矩計図について』昭和女子大学大学院 修士論文 2001

（2003年7月10日原稿受理，2003年10月15日採用決定）